
運命の歯車

慈眼 雪崩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命の歯車

【著者名】

慈眼 雪崩

N4816A

【あらすじ】

ただひたすら歯車は回る。『運命』というモノを運ぶために。いや、『運』でも『神風』でも何でもいい、とにかくこうして、皮肉にも出会つたから…

その序・ザ・ラストヘヴン、直訳で最後の天

運命とは皮肉なモノだ。

必要なときにはなつてしまつたり、
必要でないときにはなつてしまつたり、
人々はソレを『偶然』だとか『必然』だとかで分けるけど、
結局は『運命』は『運命』だけだつた。

そして、その『運命』がすばらしいモノをもたらしてくれる。

いろいろな人々と出会つ『運命』、
いろいろなモノと出会つ『運命』、
だから、『運命』というモノをもつと大切にしたい。
ふとした拍子に出会つた人。

何となく旅した一日。

これらをかけがえのない宝としているモノたちの、
それぞれの過去を持つたモノたちの、
運命の歯車が今、回り出す。

戦争は悲愴しか生まれない。

人間界 地界 では当たり前のごとく起こる争い、
それは神界 天界 でも同じことであった。

戦争の原因は至って簡単。

『領土の取り合い』

天界で最も高い地位にあり、
そこを統べると全てを統べられると言つといひ。

『最後の天界地』^{ラストヘヴン}をかけ、

天界神たちは着々と準備を進める。

そう武闘会とでも言ひモノを開催するのだ。

そして最も有力候補と言わわれてゐる神は、
『魔神』^{ましん}と呼ばれる神である。

現在でも天地界、全てをまとめてゐるのもこの神だ。

しかし運命というものは何処に転がるか分からぬ。

天界だけの『最後の天界地』をかけた争いは、
地界にも影響を及ぼすこととなる。

そしてこの戦いは、神となつた地界人が終結させるのであつた。

その1・全長2・5m・体重360kg・時速65kmのグリズリー

「雲が動いてきた…」

上を見上げておもむろに呟く。太陽が隠れそうだな。木によりかかって座っているその青年の周りには多数の人気がいた。そして多数の獣もいた。

「ギアさん。早くしてください。」

しごれを切らしたのか、周りからそう言われる。

その言葉の返事はせずに、ギアはゆっくりと上体を起こし立ち上がった。

そして軽くため息をつき、またもやゆっくりと銃を構える。… 7発の銃音と7つの体が倒れる音がした。

「コレでいいか?」

銃に弾を込めながら、確認を取るよつと言つ。

だがあまりの出来事にその質問に答える者はいなかつた。

「一発一殺。さすがだな。」

いきなり大柄な男が目の前に出てきて話しかける。
「慣れてるからな…」

無愛想に答えて、弾を込め終わった銃をしまつ。

「いやしかし、あのグリズリー相手にあれだけのことが出来るのはそうじゃないぞ。

「これは慣れなんかで出来るモノとは違つだろ。」

おもむろに金を取り出しお、ギアに投げる。

「倍入れてある。部下に良い物を見せてもらつた。」

ギアは金を受け取ると、軽く会釈をしてそのまま歩いていった。

「彼はいつたい何者なんですか？」

部下と思われる者がその男に尋ねる。

「さあな。よくわからねえ。いつも仕事をしてると結構耳にするやつだ。

先の大戦の生き残りといふのは聞いてこる。」

「へえだから強いんですね。」

その問いには答えず、その男は下を向き呟いた。

「生きてて良かつた。死んだ方が良かつた。

あいつはどちらも選ばないんだろうな、今は。」

風が木々の間を通り、揺らし、そのまま人々の間を通り抜ける。

その2・四大『地水火風』五大『地水火風空』

ファルガーの大戦

ソレは…いきなり現れた…

戦争中に出でてきた一つの銃

どこから出てきたか、誰が作つたかはいつさい不明だつた。
ソレを分析した者はその銃の威力に驚愕した。

第3のエネルギー。

ソレがソコに存在した。

8ミリ口径から出る第3のエネルギーは…

……一発で山を消し飛ばした…

すぐにソレは大量生産されたが、エネルギーの確保に問題が走つた。
人間の『氣』を媒介とされていると推測されていて、
そのころ、ソコまで大量の氣を使える能力者はいなかつたため科学
の力を使つた。

火力・水力・風力・電力・地力・その他 etc

いろいろな原子が使われた。

後にコレは五大 地水火風空とされた。

さすがに威力は激減したが、それでも家の一つは吹き飛ぶ程だつた。

人を消し去るのはもつと簡単だつた…

その銃を手にした瞬間から人は鬼と化した…

銃の恐怖におびえるあまり、敵味方問わず、乱射された。

コレにより、戦争は両国が打撃を受け、終結した。

多大な被害が出た。

かろうじて生き残つた者はこの戦争の恐怖を教えていった。

また、元通りになるにはとても時間がいると思いながら

そして人々は、その銃をこう名付けた。
罪なる銃『ファルガー』と…

ファルガーは2度と使われることはなかつた。

ソレは永久に封印するために全て、火山の火口に捨てた。
「コレでこの銃は2度と見ることもないだろう。」

やつと恐怖から逃れられ、人々は安堵の表情が出た。

しかし、結局この銃はどこから出て来たのかは分からなかつた。
いや、分かろうとしなかつた。
早く恐怖から逃れたいがタメに…

『感情は人々の思考を鈍らせる…』

いつもならすぐに考えることを、思いつかなかつた。
思いつくべきことが思いつかなかつた。

歴史は繰り返されることは、もう常識になつてゐるのに…
…恐怖が繰り返されることもまた…

その3：人が吹き飛ぶには41~47kt（ノット）・20~8~24'4m/

大戦により荒野となつた場所に一軒の家がある。

主は『ギア』「コールリッジ」先の大戦の生き残りの一人だ。
約175cmの身長で、オレンジの髪型に前髪だけ赤のメッシュが
入つているのが目立つ。

そして眼も朱というオプション付きだ。

両親はともに先の大戦より他界。

兄は大戦の時、いきなり姿を消した。

ギアの田の前で

「兄貴はあの時、何があつたんだろう…」

呟いてみるがその質問に答える者がいなかつた。

分かつてはいるがどうやら癖になつていてるみたいだな。
そう心の中で笑い、また黙り込む。

：ふと気づけば、誰かが近づいてくる気配がした。

いつの間にか集中してしまつたためか、五感が敏感になつていたようだ。

その気配は家のドアの前で止まつた。

ソレと同時にドアがたたかれる音がした。

「…俺に客人？」

珍しいな、というは心の中で付け足した。

急いでドアに駆け寄るが、ドアに手をかけた瞬間、体が凍り付くような悪寒におそわれる。

…まづい！

直感でそつ思つたギアはすぐに横の窓を破り、外へと出る。

地面に着地したのとほぼ同時に、すさまじい閃光と爆音がした。

その衝撃によりギアはそのまま数10m吹き飛ばされることになる。

そして岩に激突するが何とか受け身を取り、最小限に衝撃を抑えた。

「くつー」

衝撃に思わず声を漏らす。

しかし、いつまでも岩に張り付いてるわけにはいかないので、すぐに起きあがる。

家がある方と対になるようにして岩陰に隠れ静かに銃を取り出す。

だが、家があると思つていたところは

……何もなかつた

「ーーー」

ギアが驚いて立ち上がると同時にどこからか声が聞こえた。

「あの距離から口笛をよけるなんて… さすがにいい反射神経をお持ちですね。」

その4・火薬で空を飛ぶことが可能。火炎放射器が始まり。

声が聞こえてきたと思い、あたりを見渡すが誰もいない。
ふと、上を見てみるとソロにいた。

「こんにちは。ギア＝ホールリッジさんですね。
初めまして、アーク＝デュラムといたします。」

それだけを言って静かに降りてきた。

「いきなりなんだ、お前は。」

キッと見据えて質問をするが、その顔は相変わらず笑つたままだつた。

「：人の話聞いてました？」

それにしても、今時の人って言つのは人が空に浮いててもさほど驚かないんですね。」

「昔、そういう奴とはあつたことがあるからな、今更驚きも…。」

一度言葉を切つて右足で思いつきアーチを蹴り飛ばす。

「とりあえず、蹴つておかいと俺の気が済まなくてな。」

アークは少し飛んだがすぐに体勢を立て直して、
また元の状態に戻る。

ソロには傷一つ、いや、汚れ一つ無かつた。

「危ないですね。もう少しガードが遅れたらどうするんですか。」

右手には銃を持っていた。

しつかりと受け止めていたらしく、銃に靴跡が残っている。
アークはソレをきちんと拭く。

「その銃は…。何処かで見覚えがある…。」

いきなりギアが銃を見据えて考え込む。

「…ファルガー…！」

「あたりです。つていつても何もあげられませんが…。」

ギアの顔を見てアークは少し笑う。

「何でお前が…つて顔をしてますね。」

私は武器を集めることが趣味ですから、

この前はある貴族から妖刀『鬼食らい』なんてモノ買いましたよ。

「

そう言つてその日本刀を取り出したとたんにギアが一気に跳躍する。
拳を作り左で相手の手をねらう。

拳が当たつた瞬間、右手でその刀を奪う。
そして引き際に一度鬼食らいを横に振る。

不意打ちだったその攻撃はアークの右手をかすつただけだった。
そこから、少しだけ切り傷が生まれ血が滴る。

その状態を見てギアが軽く笑う。

「死なないってことは妖ではないようだな。」

アークもつられてか少し笑う。

その5・翼の中の色彩のメカニン色素の密度が低いと青く、高いと茶や黒くなる。

「とても詳しいですね。

その刀の能力も使い方も。」

軽く笑いながらかつ、少し満足げに呟く。

「昔、使つたことがあるからな。」

負けじと鼻で笑い、自慢気に呟く。

そうお互い言い合つた後、静寂が周りを包む。風が空を切る音がした後は、何故か大地でさえ静寂さを保つている感じになつた。

不意にギアが刀を下げる。

その様子に少しおどろいた表情だったが、すぐに想定内とでも言つた顔になつた。

「もう終わるのですか？

私としてはもう少ししゃつひ合つても戻つてたんですけど……。」

「やめだ、やめ。」

ギアがアークの言葉を遮るように呟く。

「全くお前みたいな変な奴とはもう関わらないと思ってたんだけどな。」

軽く笑つて、同時にため息もつく。

「「」説明できますか？」

その答えには軽く、ああ…、とだけ言い、地面に座る。
さつきまで静寂を保つていた大地も、騒々しさを取り戻すように活
気づく。

風も木々を揺らし、静かにギア達の周りで止まる。

「その刀はな、昔知り合いがお前の言つてた貴族から頼まれて取つ
てきたモノらしくてな。

そのときについた依頼で使わしてもらつた。

そのとき会つた奴も空を飛べたからな、お前には大して驚かなか
つた。」

「…それだけだ。」

一気に説明をすると、再び立ち上がり、鬼食らいを持つ。
ソレの柄がアークの方に向くようにして渡す。

「さつきも言つたが、お前みたいな、まさに変な奴だつたよ。
…出来れば一度と会いたくはなかつたけどな。」

アークは少し笑い鬼食らいを受け取る。

満足そうにソレを眺めた後、不意に何処かへとしまつ。
そしていきなり歩き出していくアークにギアも便乗して歩く。
歩きながらアークの後ろ姿を見る。

アーク＝デュラム。

背はそんなに高くないよつと思われる。

それでもギアとらこみの差であろうと思われる。

髪は白銀の色をしていて、頑張れば空の色と混ざつて見分けが付か

ない。

格好は、武器を持っていたにもかかわらず軽装だ。

年は見かけでは18ぐらいに見えるが、実際のところは聞いてみないことには分からぬだろ。」

眼は黒いが、あの時戦っていたときは白に染まっていた様な気もする。

ソロまで参えて、少し早歩きになり、アークの横に並ぶ。

「…それで、俺のところに尋ねてきたのには何か訳があつてのことだわ。」

さつさと用件を言つてくれ、コツチはお前に壊された家の復旧をしないといけないからな。

…もちろんお前にも大分手伝つてもうつつもりだが…。」

「流石、察しが良いですね。

…つて言つても氣づかない方がムリですね。分かりました。少し長くなるかもせんが順を追つて話させて頂きます。ついでに、多分家の修理はいらないと思います。まあその理由もこれから一緒に話させて頂きます。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4816a/>

運命の歯車

2010年11月6日13時59分発行